

## 親鸞の二種回向觀

——凡夫往生道の確立——

廣瀬 惺

### はじめに

かつて、三木清は遺稿『親鸞』において、親鸞の思想的特性について、

親鸞はつねに生の現実の上に立ち、体験を重んじた。そこには知的なものよりも情的なものが深く湛えられている。彼の思想を人間的といい得るのは、これに依るであろう。生への接近、かかる現実性、肉体性とさへい  
い得るものが彼の思想の著しい特色をなしている。<sup>①</sup>

と評した。まことに、親鸞は、仏教者でありがちな、安易な超越的觀念の中に自己を解消することを決してしない。生涯をかけて、一人の凡夫として人間でありつづけ、人間としての現実のうえに仏道を聞思し、証しつづけていったといえる。そこに、「愚禿釈」の名告りがある。

その親鸞によって開顯された仏道は、

常没の凡愚・流転の群生、无上妙果の成じ難きにあらず、真実の信樂実<sup>③</sup>に獲ること難し。といわれ、

煩惱成就の凡夫、生死罪濁の群萌、往相回向の心行を獲れば、即の時に大乘正定聚の数に入るなり。正定聚に<sup>④</sup>住するが故に、必ず滅度に至る。必ず滅度に至るは即ち是れ常樂なり。

等と示される如く、それまでの仏教が成仏（無上妙果・滅度）に重心を置いていたのに対して、信樂に、正定聚に、すなわち常没の凡愚たる現生に重心を置くものであった。そこには仏道の転換がある。出家仏教から在家仏教への転換であり、煩惱の生の現実を否定する仏教から、煩惱の生の真只中に作動し、むしろ、かかる生を人間の現実として尽くさしめるところに成就する仏教への転換である。

然して、かかる仏道の根本原理として親鸞によって見開かれたのが、『教行信証』『教巻』冒頭に、

謹んで浄土真宗を按ずるに、二種の廻向有り。一つには往相、二つには還相なり。<sup>⑤</sup>

と表せられる、二種回向である。

# 一

『教行信証』について、「教巻」・「行巻」の二巻が伝承の巻として、七祖によって伝承されてきた念仏の法の親鸞への成就を讃仰される巻であり、「信巻」以降が己証の巻として、親鸞のうえに成就した念仏の法を徹底領受し、その内面を開顕する巻であることは、既に先学によって教示されているところである。

されば、己証の巻の初巻である「信巻」に先んじて置かれている「信文類序」、通称「別序」は、当面は「信巻」の序であろうが、さらには、「信巻」以下、己証の巻全体を生み出す序として、己証の巻全体の序であるといえる。「別序」には、親鸞が己証の巻を開かねばならない契機・課題がとりあげられている。「別序」に示されている課題を尋ねることにより、本論において考察せんとする、親鸞の己証の根本である二種回向開顯の必然性、およびその内容・意義について明らかならしめうるものと思う。

「別序」には、まず、

夫れ以みれば、信樂を獲得することは、如来選択の願心自り發起す、真心を開闡することは、大聖矜哀の善巧従り顯彰せり。<sup>⑤</sup>

と述べて、ながきにわたる苦渋に充ちた「疑問」<sup>⑥</sup>のすえに、「遂に明証」<sup>⑦</sup>しえた事柄として、念仏の信樂が、教法を縁として發起する如来の願心回向の信心なることを表明する。そして、つづいて、かかる信心の領解が、いかなる課題を克服するところにえられた領解であったかを示して、

然るに末代の道俗、近世の宗師、自性唯心に沈みて淨土の真証を貶す、定散の自心に迷いて金剛の真信に昏し。<sup>⑧</sup>と述べる。

沈・迷の二機について、一般的には、「前者を仏我一如の空理を謬解する聖道の安心となし、それに対して後者を仏凡対立の行信を迷執する淨土の安心」と領解されてきた。確かに、教理上の領解としてはそうであろうが、「別序」全体の流れからして、また信体験の事実からして、そのように限定した領解は、未だ充分に意を尽くすも

のであるとはいえないであろう。沈・迷の二機の相は、普遍的に人間が有する傾向性として、人間が如来（絶対なるもの）と関わる場合に常に陥入り、それ故に、必ず超克されねばならない課題として、親鸞が見極めた二機相であるといわなければならない。その意味において、沈・迷二機相超克の課題は、共に親鸞自身の課題であり、念仏の信心そのものの課題であったといえる。ちなみに、覚如は、

念仏修行の人、之多しと雖も、専修専念の輩、甚だ稀なり。或いは自性唯心に沈みて、徒に浄土の真証を貶しめ、或いは定散の自心に迷いて、宛も金剛の真信に闇し。<sup>⑩</sup>

と述べて、二機相ともに念仏行者の相であるとしている。

すなわち、そこには、如来を単に内在的なものとして固定化・実体化してとらえるか、あるいは逆に、如来を単に超越的なものとして固定化・実体化してとらえるかという、人間の自心に立脚した信相が課題とされ、批判されているのである。前者は「自性唯心に沈」む者であり、後者は「定散の自心に迷」う者である。如来を内在的なものとして実体化するとき、「廣大無辺際」<sup>⑪</sup>なる「浄土の真証を貶す」ことを結果し、また超越的なものとして実体化するとき、「定散の自心に迷いて金剛の真信に昏」きことを結果する。而して、かかる沈・迷の二機相を超克した信心を、「如来選択の願心自り發起」した信心として明確にするのが、「信巻」の主題とするところである。

「信巻」の展開をみるに、まず『論註』からの引文をもって、

彼の无専光如来の名号能く衆生の一切の无明を破す、能く衆生の一切の志願を満てたまう。然るに称名憶念有れども、无明なお存して所願を満てざるは何ん<sup>⑫</sup>

と、称名の不如実性における問いが提出されている。そして、その問いに答えるに、

如来は是れ実相の身なり、是れ物の為の身なりと知らざるなり。<sup>⑭</sup>

と、不如実性の根拠が、如来が実相身・為物身なることへの「不知」によるものであると指摘されている。自性唯心性と定散自心性を超克した如実なる信心の確立を説明するに、畢竟するに、この、実相・為物の二身に対する「不知」の指摘を、いかに領解するかに尽くされるといえよう。

親鸞は、それにつづく善導の『観経疏』からの「三心釈」を核とする引文、源信の『往生要集』からの二文の引文、そして、「信巻」の中心である「三心一心問答」、それらを通して明瞭にしていく。いま、その一々について論じえないが、それらの展開の全体を押え、また、『論註』の不如実性に対する「不知」の指摘に応ずる親鸞の言葉を、

衆生、仏願の生起本末を聞きて疑心有ること無し。是れを聞と曰うなり。<sup>⑮</sup>

の語に求めることができると思う。親鸞は、「疑心」すなわち不如実性の克服を、「仏願の生起本末を聞く」をもって示しているのである。されば、実相・為物の二身を知るとは、仏願の生起本末を聞くことにほかならない。

「仏願の生起本末」をいかに領解するかについては種々の説があるが、私は、文字通り仏願が生起した本末、仏願生起の根元（本）と仏願生起の事実（末）と領解する。すなわち、それは、『一念多念文意』に

この一如宝海よりかたちをあらわして、法蔵菩薩となのりたまひて、无尋のちかひをおこしたまふをたねとして、阿弥陀仏となりたまふ<sup>⑯</sup>

と述べられ、また、『唯信鈔文意』に、

法身はいろもなし、かたちもまします。しかればこゝろもおよばれずことばもたへたり。この一如よりかたちをあらわして、方便法身とまふ御すがたをしめして、法蔵比丘となりのたまひて、不可思議の大誓願をおこしてあらわれたまふ御かたちおぼ、世親菩薩は盡十方无量光如来となつてたまつりたまへり。<sup>⑭</sup>

と述べられている内容である。

すなわち、「仏願の生起本末を聞く」とは、衆生の煩惱中に内在して願往生心として発動して現に救済を実現しつつある本願が、実体的に内在するものではなく、如来の因位なる法蔵菩薩の名における本願であり、衆生の現実を超越せる法性法身に根拠する本願なる事実への覚醒を求めているのである。そして、そこにおいて、法性法身と、方便法身の果なる阿弥陀仏とは別なるものではない。体は一である。衆生の自覚を越え、本願に先んじては法性法身であり、本願を通して衆生の自覚界に証知されては阿弥陀仏である。『論註』では

諸仏菩薩に二種の法身有り。一つには法性法身、二つには方便法身なり。法性法身に由って方便法身を生ず。

方便法身に由って法性法身を出す。此の二つの法身は、異にして分かつ可からず。一にして同じかる可からず。<sup>⑮</sup>と示されている。

されば、如来の実相・為物の二身なるを知るとは、如来の超越即内在、内在即超越なるを知ることである。超越即内在を知るところに無底の懺悔があり、内在即超越を知るところに救済されつつあることへの歡喜がある。ちなみに、現在刊行中の『真宗相伝義書』には、

この実相身・為物身と知らざるが不如実修行とあり。この二身は、則ち法性・方便の二身なり。則ち従如・來生の配属なり。この実相身・為物身とて別にむつかしきものにあらず。仏願の生起本末を聞きて、疑蓋雜わることなしという処がこれ実相身・為物身を知る「如実修行相應」なり。弥陀如来は、塵点久遠の古仏なれども、果後方便に法藏比丘となり、衆生にかわり願行成就して我等が為に弥陀となりたまうと知る、これ実相身・為物身を知る姿なり。<sup>⑮</sup>

と述べられている。

かくして、沈・迷の二機相克服の課題が応えられたわけであるが、それは、親鸞が『教行信証』『後序』に深い感銘をもって、師法然自らが「真筆」<sup>⑯</sup>をもって書き与えて下さった文と記している、善導『往生礼讃』の、因願と成就文とを一文とした、

若我成仏十方衆生 称我名号下至十声 若不生者不取正覺 彼仏今現在成仏 当知本誓重願不虛 衆生称念必得往生<sup>⑰</sup>

なる「真文」<sup>⑱</sup>に対する徹底領受であったといえる。そして、その徹底領受は、師法然との死別に終わる流罪を契機とした、親鸞の経論釈の学習、なかんずく、

願以て力を成ず、力以て願に就く。願、徒然ならず、力、虚設ならず。力願相符うて畢竟じて差わず。<sup>⑲</sup>

等の文に代表される如く、一貫して、超越（法性法身・方便法身の果）と内在（方便法身の因）との相即性をもって示す、『論註』の指南によるものであったといえる。かくて、親鸞は、主著『教行信証』をあらわすに、

竊かに以みれば、難思の弘誓は難度海を度する大船、無碍の光明は無明の闇を破する恵日なり。<sup>②③</sup>

と、如来の因・果をもって起筆し、

信樂を願力に彰し、妙果を安養に顕さんと。<sup>②④</sup>

と、如来の因・果をもって結ぶのである。

さて、本論のテーマである二種回向を考察するに、親鸞の己証開頭の根本課題である沈・迷二機相の超克について述べてきたが、二種回向とは、如来の超越性と内在性との相即性の原理として、『論註』を通して親鸞によって見開かれたものであり、また同時に、信心の実践的内景としての意義を有するものであるといえるのである。

## 二

親鸞の二種回向についての表現をみるに、大きく、二種類の表現がとられている。その一は、

弥陀の廻向成就して

往相還相ふたつなり

これらの回向によりてこそ 心行ともにえしむなれ<sup>②⑤</sup>

无始流転の苦をすてゝ 无上涅槃を期すること

如来二種の廻向の

恩徳まことに謝しがたし<sup>②⑥</sup>

との和讃、あるいは



如来の二種の廻向によりて、真実の信樂をうる人は、かならず正定聚のくらゐに住するがゆへに、他力とまふすなり。<sup>②</sup>

との『三経往生文類』等にみられる表現である。それは、如来の二種廻向によって行信が成就するという表現であり、行信成就の原理として二種廻向がとらえられているものである。他の一は、

南无阿弥陀仏の廻向の 恩徳広大不思議にて  
往相廻向の利益には 還相廻向に廻入せり

往相廻向の大慈より 還相廻向の大悲をう

如来の廻向なかりせば 浄土の菩提はいかゞせむ<sup>③</sup>

の和讃等に代表される表現である。それは、念仏の法に帰した者に与えられ、開かれる功德・利益としての二種廻向観であるといえる。そして、親鸞の二種廻向についての表現全体からするなら、後者に属する表現が多いのである。

而して、かかる二種類の二種廻向についての親鸞の表現を、どのように領解すればいいのか。結論的に述べるなら、私は、いうまでもなく、二種廻向の体が二種類あるのではなく、二種廻向について表現する視座・問題関心の違いによって二種類の表現がとられていると領解する。すなわち、前者は、行信成就の背景として讃仰する二種廻向観であり、後者は、信心が信心の内に見開いてくる、換言すれば、信心が信心の背景を自らの境界としていく側

面としての二種回向観であるといえる。そして、そのように、行信成就の背景が同時に信心の境界として開かれるところに、親鸞の二種回向観の根本があるのである。

ところで、親鸞の二種回向観について、一概にはいえないが、從來一般的に、たとえば香月院深励師の、

廻向と云ふは如来の方から施與し給ふが廻向なり。(中略)如来の功德を、これも衆生の為め、此れも衆生の為めと、衆生にめぐらし向はしむるが廻向なり。また往相還相と云ふは、衆生の方にあることなり。(中略)

往還二相は衆生に約して名を得るなり。廻向の言は弥陀に約して、衆生が娑婆より浄土に往生する往相も、浄土から立ち還りて、衆生を済度する還相も、皆な他力廻向なり。それを二種の廻向と云ふ。<sup>⑧</sup>

との説に代表される如く、往相・還相は衆生に属し、回向は如来に属すと領解されてきたといえる。しかし、かかる一面的な領解では、親鸞の二種回向観は尽くせないと思う。<sup>⑨</sup>「衆生」に対する実体化の執(それ故、如来に対する実体化の執)を残存せしめている感が否めないし、また、『論註』の二回向を示す文に対する親鸞の訓みからして、かくいえるのでないかと思う。親鸞は、次の如く訓んでいる。

云何が廻向したまえる。一切苦悩の衆生を捨てずして、心に常に作願すらく、廻向を首として大悲心を成就することを得たまえるが故にとのたまえり。廻向に二種の相有り。一つには往相、二つには還相なり。往相は、己が功德を以て一切衆生に回施したまいて、作願して共に彼の阿弥陀如来の安楽浄土に往生せしめたま

う。なり。還相は、彼の土に生じ已りて、奢摩他毗婆舍那方便力成就することを得て、生死の稠林に廻入して、一切衆生を教化して、共に仏道に向かえしめたまうなり。若しは往・若しは還、皆衆生を抜きて生死海を渡せんが為に、とのたまえり。<sup>⑭</sup>

その訓みによるに、根本的に、往還ともに如来が衆生を救わんとする相として、親鸞はとらえていたといわねばならない。如来が「苦悩の衆生」を見出すことにより、その苦悩の衆生と共に救われんとする如来の大悲行が「回向」であり、その「回向」に、往相・還相の二相があるとの領解である。すなわち、往相を特徴づけるのが「回施」であり、還相を特徴づけるのが「廻入」であることに着眼するなら、往相回向とは、如来が衆生の行信として煩惱的現実中に表現（回施）し、衆生と共に従因向果する相である。また、還相回向とは、衆生を超越せる如来が、衆生の煩惱的生の内に従果向因（回入）する相であるといえる。そして、従因向果する如来とは、如来の因位法蔵菩薩であり、従果向因する如来とは法性法身（果位の阿弥陀）であることはいうまでもない。

親鸞は、行信、因果、往還のそれぞれについて、

若しは行・若しは信、一事として阿弥陀如来の清淨願心の回向成就したまう所に非ざること有ること無し。<sup>⑮</sup>

（教行信証・文類聚鈔）

若しは因・若しは果、一事として阿弥陀如来の清淨願心の回向成就したまうまう（文類聚鈔）所に非ざること有ること無し。<sup>⑯</sup>

（教行信証・文類聚鈔）

若しは往・若しは還、一事として如来清淨の願心の回向成就したまう所に非ざること有ること無きなり。<sup>⑰</sup>

## (文類聚鈔)

と、『教行信証』および『文類聚鈔』に五度にわたって同形式の表現をしているが、そこにも、かかる二種回向に對する領解の裏付けを求めえると思われる。すなわち、他が全て「阿弥陀如来の清淨願心」と表記されているのに對して、往還にかぎって「如来清淨の願心」と記されているのである。それは、行信・因果の往相が方便法身なる阿弥陀に限定されるに對して、往還の場合、還相が、「一如よりかたちをあらわして、方便法身とまふす御すがたをしめして、法藏比丘となりのりたま」う事實なるが故に、一如（法性法身）を包んで、方便法身の名である阿弥陀如来ではなく、「如来清淨の願心」と表現したものと思われるのである。

而して、以上の如く親鸞の二種回向観を領解しうるとするなら、法藏菩薩の名をもってせられる四十八願は、如来の、還相回向成就に根拠する往相回向の本願であるといわなければならない。『末燈鈔』には、

法身とまふす仏のさとりをひらくべき正因に、弥陀仏の御ちかひを、法藏菩薩われらに廻向したまへるを、往相の廻向とまふすなり。この廻向せさせたまへる願を、念仏往生の願とはまふすなり。この念仏往生の願を、一向に信じてふたごゝろなきを、一向専修とはまふすなり。如来二種の廻向とまふすことは、この二種の廻向の願を信じ、ふたごゝろなきを、真実の信心とまふす。<sup>⑧</sup>

と述べられている。そこに、法藏菩薩の発願として経説されている本願について、本来果位の「弥陀仏の御ちかい」であり、それを今、法藏菩薩が「われらに回向したまえる」のであると示されている。衆生に救済を直接する法藏菩薩の名による本願は、本来、果上の阿弥陀の本願であり、逆にいえば、果上の阿弥陀の本願は、因位なる法

藏菩薩の名による本願となつてこそ、はじめて、願往生心として発動する本願として衆生救済の本願たるの意義を有しうることである。かくて、さらに『末燈鈔』では、第十八念仏往生の願について、「この二種の廻向の願」というのである。まさしく、『大經』所説の法藏菩薩の名をもつてされる本願は、如来の、還相回向成就に根拠する往相回向の本願なのである。

さて、親鸞の二種回向観について、如来の超越即内在・内在即超越なる相即性の原理として、如来の従果向因（超越即内在）する相を還相回向、如来が衆生を摂して従因向果（内在即超越）する相を往相回向と領解してきたのであるが、かかる二種回向観は、その前後次第をいえば、還相が往相に先行するものであるといわなければならない。如来が衆生の煩惱中へ従果向因すればこそ、衆生を摂して従因向果するのである。そこに、その二種回向観は、因果次第をもつて経説される方便法身としての阿弥陀観を超えて、さきに述べた如く、法性法身との不二異なる阿弥陀観において成り立つものである。かくて、親鸞は、

弥陀成仏のこのかたは いまに十劫ときたれど

塵點久遠劫よりも ひさしき仏とみえたまふ<sup>⑤</sup>

久遠実成阿弥陀仏

五濁の凡愚をあわれみて

釈迦牟尼仏としめしてぞ 迦耶城には応現する<sup>⑥</sup>

と、和讃するのである。

以上、親鸞の二種回向観をたずねてきたのであるが、それは、本項のはじめにみた、親鸞の二種回向についての二種類表現に即していえば、最初の、行信成就の背景として讃仰する二種回向観に相当するものである。そこに、さらにもう一方の、信心の境界として開かれる、まさしく信心の実践的側面としての二種回向観をたずねなければならぬ。

### 三

親鸞をして二種回向を開顕せしめた契機を、『教行信証』「別序」の沈・迷二機相の超克に求めた。沈・迷二機相とは、如来を内在的なものとして実体化することによって「廣大無辺際」なる「浄土の真証を貶す」るものであり、また逆に、如来を超越的なものとして実体化することによって「定散の自心に迷いて金剛の真信に昏」るものであった。かくて、かかる如来に対する執を克服して、如来の超越即内在性・内在即超越性の原理として見開かれたのが二種回向であった。されば、かかる二種回向の世界において、

南无阿弥陀仏の廻向の 恩徳広大不思議にて

往相廻向の利益には 還相廻向に廻入せり<sup>④</sup>

との和讃等に述べられる、親鸞の二種回向の表現において多数を占める二種回向の表現は、いかなる宗教的事柄を示すものであろうか。一言にていえば、先に述べた如く、信心が信心の境界として開いた二種回向観であるといえる。

そもそも、

信心のたまをこゝろにえたる人は生死のやみにまどはざるゆえに、「心照迷境」といふ也。<sup>④</sup>

と述べられる如く、信心こそは衆生の煩惱の現実の只中にはたらく如来心である。もって、衆生のうえに救済を実現せしめるのである。而して、その救済は、先に述べた如き如来の二種回向の世界を衆生のうえに、救済の内実として開くことをもってするのである。何故なら、如来との値遇によって衆生は救いをえるのであり、二種回向としてはたらく如来こそが、衆生救済に現働する如来だからである。親鸞は、

如来の作願をたづぬれば 苦悩の衆生をすてずして

廻向を首としたまひて 大悲心おぼ成就せり<sup>⑤</sup>

と和讃する。

されば、信心が往相回向を自らの境界とするところに、われらは生死を超えしめられ、還相回向成就を境界とするところに、生死の現実を尽くさしめられていくといえよう。そこに、われらの救いがある。まことに、われわれにとって救いとは、単に苦悩せる生死の現実を超えるところにはない。確かに、超える道が与えられなければ救いはないにちがいない。しかし、内に煩惱成就し、外に業縁の絆に結ばれて生きるところに、逃れえぬわれらの現実がある。されば、生死を超える道は、生死の現実を尽くしえる道が開かれてこそ、確かな道たりえるのである。さもなくば、平安浄土教がそうであった如く、生死を超えするというのも、単なる現実逃避に墮するか、常に生死の波にさらわれて浮沈を繰り返し、より深い流転の闇に閉ざされるほかないであろう。

親鸞の生涯をふりかえるとき、その生は、常に生死の現実を生きる人間としての生を一步も離れえないところに置かれていたといえる。故にこそ、親鸞の宗教世界が、生死の現実を離れては生きえぬ凡夫の救済の世界として、確実性を有しているのである。『恵信尼消息』には親鸞の生涯における出来事が二つ記されている。一つは、法然との値遇、すなわち回心の出来事であり、いま一つは、恐らく飢饉という現実苦に当面しての三部經千部読誦に関する記述である。そして、それは、関東時代約二十年通じての課題であったことが知られる。親鸞にとって、生死する人間の現実が如何に重大な問題であったかがうかがわれる。その現実を単に虚妄なるものとして否定するのではなく、その現実をどこまでも人間の現実として尽くし、その真只中に生死超克の道を開く仏道をこそ、親鸞は求めたのであるといえる。そこに、二種回向開顯による「浄土真宗」の名告りがある。

親鸞は、

九十五種世をけがす 唯仏一道きよくます

菩提に出道してのみぞ 火宅の利益は自然なる<sup>④</sup>

と和讃しているが、その和讃において、「火宅の利益は自然なる」の句を、草稿本では「火宅に還来自然なる」と記している。親鸞にとって、火宅に還来しうるものが、信心の無上の利益であったことが知られよう。

さて、結論を急がねばならない。以上述べてきたところに明らかな如く、信心が自らの境界として開く二種回向について、往相回向を境界とするとは、如来の従因向果性を自らの境界とすることであり、それは生死を超えていくことである。また、還相回向を境界とするとは、信心の根源として、衆生の煩惱中に従果向因したまえる還相の



菩薩たる因位法蔵菩薩の願心に感應を求め、どこまでも、その願心を自らの心としていかんとすることである。私は、かかる信心の相を、

願成就の一念は、即ち是れ専心なり。専心即ち是れ深心なり。(中略) 眞実一心即ち是れ大慶喜心なり。大慶喜心即ち是れ眞実信心なり。眞実信心即ち是れ金剛心なり。金剛心即ち是れ願作仏心なり。願作仏心即ち是れ度衆生心なり。度衆生心即ち是れ衆生を攝取して安樂淨土に生ぜしむる心なり。「是の心即ち是れ大菩提心なり。是の心即ち是れ大慈悲心なり。是の心即ち是れ無量光明慧に由つて生ずるが故に」<sup>④</sup>

と記せられる、『教行信証』『信巻』の一念転依の一段にうかがうことができると思う。画一的に区分しえないが、試みに一応の区分をもつてするなら、「眞実信心なり」までが往相回向を境界とする過程であり、それ以下「大慈悲心なり」までが還相回向成就を境界としていく過程、そして「是の心即ち是れ無量光明慧に由つて生ずるが故に」が、その還相回向成就の法蔵菩薩の願心が、果なる阿弥陀(法性法身)の還相回向したまえる願心であることを示すものであるといえよう。

そして、そのように法蔵菩薩の願心に限りなく感應していく信心の相は、終には、法蔵菩薩との一如性を求め、法蔵菩薩にその成就相を見出すものといわなければならない。そこに、信心の境界としての還相回向が、法蔵菩薩の従果向因性に同ずるものとして、従因向果なる往相回向成就に次第するものとして念ぜられ、

往相回向の利益には、還相回向に回入せり<sup>⑤</sup>

と表現されることは、当然であるといえるのである。

ともあれ、信心は、還相回向成就（如来の従果向因成就なる法蔵菩薩の願心）を自らの境界としてゆくところに、衆生をして生死の現実に惑いなく立ち帰えらしめ、尽くさしめつづけるのであり、そこに、往相回向（如来の従因向果性）を衆生のうえに確實なものとして開きつづけて、生死を超越せしめてゆくのである。そこに、親鸞によって開顯された二種回向によって立つ浄土真宗は、凡夫の往生道を確立せしめるものであったといわなければならないのである。もって、親鸞は主著『教行信証』を、

信樂を願力に彰し、妙果を安養に顯さんと矣。<sup>④</sup>

の文をもって結ぶのである。それは、如来の還相回向成就なる法蔵菩薩の願力に、限りなく感応してゆくところに生死超越の境を開く、二種回向を原理とする浄土真宗開顯の書を結ぶに、まことにふさわしい文である。

## 註

- ① 岩波書店刊『三木清全集』十八―四二三
- ② 『親鸞全』一一九六
- ③ 『親鸞全』一一九五
- ④ 『親鸞全』一一九
- ⑤ 『親鸞全』一一九五
- ⑥ 『親鸞全』一一九五
- ⑦ 『親鸞全』一一九五
- ⑧ 『親鸞全』一一九五
- ⑨ 『曾我量深選集』四一九六 本引文ヶ所につづいて、曾我量深師は、「それが為に信と証との関係について甚だ明瞭をか

いて居った」と述べて、かかる見解を否定されている。

- ⑩ 『真全』三―六五七
  - ⑪ 『真全』一―二六九
  - ⑫ 『親鸞全』一―一〇〇
  - ⑬ 『親鸞全』一―一〇〇
  - ⑭ 『親鸞全』一―一三八
  - ⑮ 『親鸞全』三(和文篇)―一四五
  - ⑯ 『親鸞全』三(和文篇)―一七一
  - ⑰ 『親鸞全』一―二一〇
  - ⑱ 『真宗相伝義書』三―八一
  - ⑲ 『親鸞全』一―三八一
  - ⑳ 『親鸞全』一―三八二
  - ㉑ 『親鸞全』一―三八二
  - ㉒ 『親鸞全』一―七九
  - ㉓ 『親鸞全』一―五
  - ㉔ 『親鸞全』一―三八三
- この文を「矣」で結んでいるが、それは「総序」の結びと同様であり、そこで「イヒオハルコトハナリ」との右訓をほどこしている。もって、「後序」は一応この文をもって結ばれているといえよう。
- ㉕ 『親鸞全』二(和讃篇)―九三
  - ㉖ 『親鸞全』二(和讃篇)―一八二
  - ㉗ 『親鸞全』三(和文篇)―二八
  - ㉘ 『親鸞全』二(和讃篇)―一八三
  - ㉙ 『教行信証講義集成』一―二四三
  - ㉚ 『真宗相伝義書』では、かかる二種回向観について「通途以為、阿弥陀如来因位果上の功德利益を得て、凡夫が往生する

を往相と云い、往生しおわりて還来祇国度人夫と、我が娑婆へかえるを還相とおもえり。これも成る程、二種廻向の一分ならぬにはあらねども、ともに機より立つ処の法門なり。」(『真宗相伝義書』三一・一二)と述べ、独自の二種回向観を展開している。本論はその二種回向観に学ぶところ大であるが、『真宗相伝義書』の二種回向観については、同朋学園仏教文化研究所の『研究紀要』において論ずる機会が与えられているので、それに譲ることとする。

③1 『親鸞全』一―一二八

③2 『親鸞全』一―一一五

『親鸞全』二(漢文篇) 一―三五

③3 『親鸞全』一―二〇一

『親鸞全』二(漢文篇) 一―三七

③4 『親鸞全』二(漢文篇) 一―三七

③5 前出

③6 『真宗相伝義書』八―八には、「四十八みな果後、還相の大悲なり」と述べられている。

③7 『親鸞全』三(書簡篇) 一―二一

③8 『親鸞全』二(和讃篇) 一―三六

③9 『親鸞全』二(和讃篇) 一―五四

④0 前出

④1 『親鸞全』三(和文篇) 一―〇五

④2 『親鸞全』二(和讃篇) 一―七七

④3 『親鸞全』二(和讃篇) 一―六四

④4 『親鸞全』二(和讃篇) 一―五〇

④5 『親鸞全』一―一三九

④6 前出

④7 前出